

短期海外研修の英語学習におよぼす効果

－2週間のオーストラリア研修の場合－

Effects of the short term overseas study on English learning

－Two weeks of study in Australia－

キーワード：海外研修、動機づけ、学習意欲

内 藤 豊

NAITO, Toru

1. はじめに

平成9年の夏季休暇を利用して合計12名の高校生がオーストラリアでの語学研修プログラムに参加した。これは福井県国際理解教育研究会が企画を行い、ISA(International Student Adviser's of Japan)が旅行を担当し、AIU(Australian Institute of International Understanding)の学習内容にそって研修を行うというものであった。STUDY CENTER は NEW SOUTH WALES 州 MURWILLUMBAH にある TWEED VALLEY ADVENTIST COLLEGE である。参加者は、月曜日から金曜日まで、現地の英語教授法をマスターした教師によって、授業形式で語学研修を受けた。また、その学校では、文化・教育面での生徒同士の交流も行われた。土曜日と日曜日はホームステイをしている家族と終日英語を使用して生活するというものであった。ホームステイは一家族に日本人生徒一人を配置してもらい、日本語を話さないようにした。従って、このプログラムの中では、朝の集合や昼食時間に日本人同士で会う以外には、ほとんどネイティブ・スピーカーと英語を話さなければならない状況であったと言える。

2. 研究の目的

言語習得という観点から、学習者が海外において、学校などで授業を受けたりホームステイを経験するということは大きな動機づけとなり、言語習得の上で非常に効果的であると考えられる。このように設定された海外研修は、単なる観光的なものとは異なり、リスニングやスピーキングのレベル向上のみならず、それ以降の言語習得全体にも効果的に作用するであろう。なお、これに関して内藤(1998)は3週間の短期海外研修をすることにより

- 1) リスニングの技能を伸長することができる。
- 2) スピーキングの技能を伸長し、その積極的な態度を向上させることができる。
- 3) 語学学習に対する積極的な態度を養うことができる。

という3つの仮説が支持されたと報告している。

今回も、本校から4名がオーストラリアでの2週間の海外研修に参加した。この小論では、2週間の語学研修を通してどのような技能が伸び、また、この研修がどのように学習に影響を与えたかを明らかにしたい。さらに、前年度の3週間の語学研修と比較してどれくらい違うのかも考察したい。

3. 実験研究

- (1) 被験者：鯖江高等学校1学年8名(海外研修参加者4名と不参加者4名)

(2) 研修期間：平成9年7月24日より8月8日までの約2週間

(3) 仮説：

海外研修をすることにより

- 1) リスニングの技能を伸長することができる。
- 2) スピーキングの技能を伸長し、その積極的な態度を向上させることができる。
- 3) 語学学習に対する積極的な態度を養うことができる。

(4) 分析方法 [内藤 徹(1997), Hatch(1982)]

！ 検定 (2つの平均の有意差)

標準偏差 (分布状態)

リーディング・イーズ (文の難易度) [数値が小さくなれば難、大きくなれば易となる]

など

(5) 使用テストと方法 [括弧内は満点]

文字言語を中心としたテスト

実力テスト=実力文字言語テスト (100点) 英単=英単語テスト (100点)

模試=進研連合模擬試験 (100点) 中間1、中間2=中間考査の文字言語テスト (100点)

CLOZE=クローズテスト (100点) 期末1、期末2=期末考査の文字言語テスト (100点)

リスニングテスト

放送テストC=福井県英語放送テストC (100点)

放送テストD=福井県英語放送テストD (100点)

スピーキングテスト

1コマ漫画=英語検定試験用の1コマ漫画 (話すことを話しをしようとする態度も測定)

テスト方法：[方法については 小寺他(1995)を参考にした]

1コマ漫画を見せて2分間内容を英語で考えさせ、その後その漫画について説明をさせた。内容を音声テープに録音したものを書き写し、使用された語数、文の数を数えた。また、ストップウォッチで発話全体の長さを測り、それを秒で表した。発話が止まっている時間や同じことを繰り返しているものは測定時間には入れていない。また、発話の難易度を Flesch Formula によって算出し、発話者の話す難易レベルを測定した。

リスニングとスピーキングのテスト

英検方式=実用英語検定試験準2級のテスト方式により、リスニング・リーディング・スピーキングの学力を測定。5つの質問の合計 (25点) とリーディング (5点)

ALT との対話

反応/流暢 (10点) =会話としての反応の速さ、流暢さについて。話しをしようとする態度も含まれている。

内容/知識 (10点) =会話の内容と知識などについて。

文法/正確 (10点) =文法的正しい文の使用について。

発音など (10点) =発音、アクセント、イントネーションの正確さについて。

合計 (40点) = 上記4項目の合計。

テスト方法:

挨拶や学校・学習・クラブなどのことについて ALT が質問をして、生徒がそれに答えるという方法。

(6) 結果および分析 (被験者はすべて女子)

TABLE 1

研修前 (6月下旬)

研修有 (実験群)	実テスト	模試	CLOZE	英単	放テ	1コマ漫画	発話文	1コマ漫画	ALTとの対話	内容	文法	発音	合計		
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	実	模	CLOZE	英単	放テ	使用された	難易度	英検方式	反応	知識	正確	等			
	1	試			C	文		合計	流暢	知識	正確	等			
						秒		読み	知識	知識	正確	等			
A	86	38	40	48	55	15	4	14	13.3	19	3	9	8	8	33
B	70	56	44	33	65	30	5	23	93.6	22	4	7	7	8	30
C	76	53	50	38	90	10	2	7	100.2	21	4	8	7	8	32
D	84	54	56	33	85	43	7	20	110.1	16	3	8	7	8	31
TOTAL	316	201	190	152	295	98	18	64	377.2	78	14	32	29	32	126
MEAN	79.0	50.3	47.5	38.0	73.8	24.5	4.5	16.0	94.3	19.5	3.5	8.0	7.3	8.0	31.5
SD	6.4	7.2	6.1	6.1	14.3	13.0	1.8	6.1	13.5	2.3	0.5	0.7	0.4	0.0	1.1

研修無 (統制群)

研修無 (統制群)	実テスト	模試	CLOZE	英単	放テ	1コマ漫画	発話文	1コマ漫画	ALTとの対話	内容	文法	発音	合計		
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
	実	模	CLOZE	英単	放テ	使用された	難易度	英検方式	反応	知識	正確	等			
	1	試			C	文		合計	流暢	知識	正確	等			
						秒		読み	知識	知識	正確	等			
E	75	39	54	33	70	14	3	12	75.2	22	3	9	9	8	34
F	62	39	38	28	75	15	3	11	96.6	18	4	10	9	9	37
G	71	37	32	33	70	14	2	8	103.0	16	4	7	7	8	31
H	80	56	36	33	65	31	5	20	102.3	19	4	10	9	9	37
TOTAL	288	171	160	127	280	74	13	51	377.1	75	15	36	34	34	139
MEAN	72.0	42.8	40.0	31.8	70.0	18.5	3.3	12.8	94.3	18.8	3.8	9.0	8.5	8.5	34.8
SD	6.6	7.7	8.4	2.2	3.5	7.2	1.1	4.4	11.3	2.2	0.4	1.2	0.9	0.5	2.5

I-TEST

実テスト	p<0.3	1コマ漫画英検方式
模試	p<0.3	合計
CLOZE	p<0.3	読み
英単	p<0.2	ALTとの対話
放テ	p<0.7	反応/流暢
1コマ漫画		内容/知識
語	p<0.6	文法/正確
文	p<0.4	発音等
発話の秒	p<0.5	合計
発話文の難易度	p<0.1	

TABLE 2

研修後 (9月上旬)

研修有 (実験群)	実テスト	CLOZE	英単	放テ	1コマ漫画	発話文	1コマ漫画	ALTとの対話	内容	文法	発音	合計			
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2			
	実	CLOZE	英単	放テ	使用された	難易度	英検方式	反応	知識	正確	等				
	2			C	文		合計	流暢	知識	正確	等				
					秒		読み	知識	知識	正確	等				
A	78	35	60	95	49	10	53	81.0	21	4	9	9	8	35	
B	86	41	55	70	69	12	63	94.3	20	4	10	9	9	10	38
C	94	30	45	80	37	6	27	97.7	24	4	10	8	8	10	36
D	63	29	60	85	87	15	83	94.4	22	5	9	9	8	9	35
TOTAL	321	135	220	330	242	43	226	367.4	87	15	38	35	33	38	144
MEAN	80.3	33.8	55.0	82.5	60.5	10.8	56.5	91.9	21.8	3.8	9.5	8.8	8.3	9.5	36.0
SD	11.5	4.8	6.1	9.0	19.1	3.3	20.2	6.4	1.5	0.4	0.5	0.4	0.4	0.5	1.2

研修無 (統制群)

研修無 (統制群)	実テスト	CLOZE	英単	放テ	1コマ漫画	発話文	1コマ漫画	ALTとの対話	内容	文法	発音	合計			
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2			
	実	CLOZE	英単	放テ	使用された	難易度	英検方式	反応	知識	正確	等				
	2			C	文		合計	流暢	知識	正確	等				
					秒		読み	知識	知識	正確	等				
E	63	39	50	85	15	3	13	83.3	18	3	8	8	8	32	
F	68	36	40	90	29	6	20	102.8	18	5	7	8	8	31	
G	63	40	45	65	18	3	12	93.3	16	4	7	8	7	8	30
H	80	42	40	85	30	6	20	100.2	18	4	8	8	8	7	31
TOTAL	274	157	175	325	92	18	65	379.6	70	16	30	32	31	31	124
MEAN	68.5	39.3	43.8	81.3	23.0	4.5	16.3	94.9	17.5	3.8	7.5	8.0	7.8	7.8	31.0
SD	6.9	2.2	4.1	9.6	6.6	1.5	3.8	7.5	0.9	0.4	0.5	0.0	0.4	0.4	0.7

I-TEST	
実テスト	p<0.2
CLOZE	p<0.2
英単語	p<0.2
放送テストC	p<0.9
1コマ漫画	
語	*p<0.04
文	*p<0.02
発話の秒	*p<0.03
発話文の難易度	*p<0.08

1コマ漫画英検方式	
合計	**p<0.005
読み	p<1
ALTとの対話	
反応/流暢	**p<0.003
内容/知識	*p<0.08
文法/正確	p<0.2
発音等	**p<0.004
合計	***p<0.001

TABLE 3

研修後 (10月)			
研修有 (実験群)			
	中間1	中間2	放テD
A	96	85	56
B	80	77	43
C	88	84	66
D	93	89	55
TOTAL	357	335	220
MEAN	89.3	83.8	55.0
SD	6.1	4.3	8.2

TABLE 4

研修後 (11月)		
研修有 (実験群)		
	模試	放テD
	56	73
	46	66
	52	70
	52	69
TOTAL	206	278
MEAN	51.5	69.5
SD	3.6	2.5

TABLE 5

研修後 (12月)		
研修有 (実験群)		
	期末1	期末2
	91	86
	88	86
	95	93
	91	93
TOTAL	365	358
MEAN	91.3	89.5
SD	2.5	3.5

研修無 (統制群)

	中間1	中間2	放テD
E	74	73	53
F	51	46	50
G	54	51	42
H	88	71	72
TOTAL	267	241	217
MEAN	66.8	60.3	54.3
SD	15.1	11.9	11.0

研修無 (統制群)

	模試	放テD
	42	59
	36	56
	23	49
	39	66
TOTAL	140	230
MEAN	35.0	57.8
SD	7.2	6.1

研修無 (統制群)

	期末1	期末2
	71	71
	65	63
	60	63
	78	75
TOTAL	274	272
MEAN	68.5	68.0
SD	6.7	5.2

I TEST

中間1	*p<0.05
中間2	*p<0.02
放送テストD	p<0.9

模試	*p<0.02
放送テストD	*p<0.02

期末1	**p<0.002
期末2	**p<0.002

4. 考察

研修の効果を見るために、研修前 (6月下旬) と研修後 (9月初旬、10月、11月、12月) にテストを行った。

7月下旬の研修前 (TABLE 1) の実力テストでは実験群と統制群は 79.0 と 72.0、模試で 50.3 と 42.8、CLOZE TEST で 47.5 と 40.0、英単語テストで 38.0 と 31.8、放送テストCで 73.8 と 70.0 で有意差は見られない。1コマ漫画においては、使用された語数は 24.5 と 18.5、文の数は 4.5 と 3.3、発話全体の長さは 16.0 と 12.8 で3項目とも有意差は見られない。発話文の難易度は 94.3 と 94.3 で全く有意差はない。1コマ漫画英検方式のテストでは、合計で 19.5 と 18.8、読みで 3.5 と 3.8 で有意差はない。ALT との対話では、反応/流暢は 8.0 と 9.0、内容/知識は 7.3 と 8.5、文法/正確は 8.0 と 8.5、発音などは 8.3 と 8.8、合計でも 31.5 と 34.8 で有意差は見られない。実力テストと模試を中心に研修生と成績がよく似た4名を選んだのだが、結果的に全ての種類のテストにおいて有意差がないということになった。ただし、ALT との会話において、内容/知識と合計では留学をしない統制群の生徒の方が若干勝る傾向が見られるが、統計上の有意差ではない。

9月上旬の研修後 (TABLE 2) の実力テストでは実験群と統制群は 80.3 と 68.5、CLOZE TEST では 33.8 と 39.3、英単語テストでは 55.0 と 43.8、放送テストCでは 82.5 と 81.3 で有意差は見られない。従って、文字言語、英単語、リスニングにおいては向上したとは言えない。1コマ漫画においては、使用された語数は 60.5 と 23.0 で4%水準で、文の数は 10.8 と 4.5で2%水準で、発話全

体の長さは 56.5 と 16.3 で 3% 水準で有意差がある。従って、1コマ漫画の3項目全てにおいて有意差が見られたわけである。発話文の難易度では 91.5 と 94.9 で有意な傾向が見られる。これは、留学生がより難易度の高い文を話す傾向があるわけである。1コマ漫画英検方式では、合計で 21.8 と 17.5 で 0.5% 水準で有意差があるが、読みでは 3.8 と 3.8 で有意差はない。ALT との対話では、反応/流暢は 9.5 と 7.5 で 0.3% 水準で有意差がある。内容/知識では 8.8 と 8.0 で有意な傾向が見られる。文法/正確では 8.3 と 7.8 で有意差はない。発音などは 9.5 と 7.8 で 0.4% 水準で有意差がある。合計では 36.0 と 31.0 で 0.1% 水準で有意差が見られる。従って、反応も速く流暢に発音も上手に話せるようになり、ALT とのコミュニケーションは全般的にうまくなったが、文法的正確さにおいてはそれ程向上したわけではないと言える。

10月の中間考査(TABLE 3)においては、中間1で 89.3 と 66.8 で 5% 水準、中間2で 83.8 と 60.3 で 2% 水準で有意差がある。文字言語でもこの時点では向上が見られる。しかし、放送テストDでは 55.0 と 54.3 で有意差は見られない。

11月の模試(TABLE 4)では 51.5 と 35.0 で 2% 水準で有意差があり、文字言語での向上が再確認された。そして、放送テストDでは 69.5 と 57.5 で 2% 水準で有意差が見られ、この時点でリスニングの向上が見られた。

12月の期末考査(TABLE 5)においては、期末1で 91.3 と 68.5、期末2で 89.5 と 68.0 で各々 0.2% 水準で有意差がある。従って、英語の学力は文字言語において、さらに向上したと言えよう。

それでは、仮説の検証である。「1）リスニングの技能を伸長することができる」というのは、9月と10月の2回の放送テストで有意差は見られなかったが、11月の3回目の放送テストで 2% 水準で有意差が見られ、支持された。しかし、これは研修の直接の効果ではなく、英語に対する動機づけがなされた結果と考えられる。「2）スピーキングの技能を伸長し、その積極的な態度を向上させることができる」というのは、1コマ漫画英検方式において 5% 水準、また、ALT との対話においても全体的に 0.1% 水準で有意差が見られた。さらに、1コマ漫画の語数、文数、秒数の3項目においても、それぞれ 4% 水準、2% 水準、3% 水準で有意差が見られ、発話される語や文が増え話す時間が長くなったと言える。これは、スピーキングの技能だけでなく、話しをしようとする積極的な態度にも効果があったと考えられる。従って、仮説2)は支持されたことになる。そして、発話文の難易度に関しても、比較的難しい文を話す傾向も見られるようになった。「3）語学学習に対する積極的な態度を養うことができる」というのは、研修直後に有意差がなかった文字言語の学力が、2か月後、さらには3か月後に 5% 水準から 0.2% 水準へと、徐々に大きな有意差が見られ向上していった。そして、リスニングについても、有意差なしから 2% 水準の有意差へと向上し、ほぼ同様のことが言える。従って、仮説3)も支持されたと言える。

以上を簡単にまとめれば、研修直後には、留学生のスピーキングの学力はかなり向上し、発話の反応も速く流暢に多くのことを話せるようになったが、文字言語とリスニングの学力はその時点では特に向上したわけではなかった。しかし、月日が経つにつれて文字言語とリスニングの学力も徐々に向上し、模擬試験の成績まで伸長するに到った。この文字言語とリスニングの学力が伸長したということは、海外研修をした直接の効果ではなく、英語学習に対する動機づけがなされたために、徐々に向

上したと考えられる。また、研修生達もこのことを実感しているようである。なお、動機づけにも関することであるが、4名の研修生達は全員E S Sに所属して、週2回の活動を楽しんでいる。

5. おわりに

2週間の短期海外研修は、英語の動機づけになればそれだけでも成功であると言う意見もある。しかし、今回のデータ分析により、3つの仮説が支持され、直接の効果と動機づけによる効果が明らかになった。このことにより、海外研修は2週間であってもかなりの効果をもたらしたと言える。技能の向上だけでなく、英語学習に対する積極的な態度の向上も含めて、英語の学習に大きな影響を与えていると思える。研修中、できるだけ日本語を使わないように、そしてこの貴重な機会を十分に生かすように指導することによって、効果はより大きくなるものであることを再確認した。

また、今回の2週間の海外研修は、前年度の同じオーストラリアでの3週間の研修と比較してみても、ほとんど変わらないくらい、英語のスピーキングの学力が向上し、そして英語学習に対する大きな動機づけもなされたと言える。しかし、3週間の研修では研修直後にリスニングの学力が向上したにもかかわらず、今回は動機づけの効果により、ALTやラジオ・テレビなどを利用することによって約3か月後に向上したことになる。従って、スピーキングは目標言語のインプットがなされていれば、その言語に慣れることによって、2週間でも3週間と変わらないくらいの伸びが見られたが、リスニングは音変化などに慣れるのに、2週間では不十分で3週間の研修を要したことになる。ここに、1週間の違いが見られるのであろうか。

(福井県立 鯖江高等学校)

引用文献

- Hatch, Evelyn and Hossein Farhady 1982. *Research Design and Statistics for Applied Linguistics*, Newbury House Publishers, Inc. pp.57-61, pp.108-127,
- 小寺光雄・伊達正起・原口 治 1995. 「ホームステイ海外語学研修の指導とその効果について」『福井工業高等専門学校 研究紀要 人文・社会科学 第29号』 pp.229-240
- 内藤 徹 1997. 『新しい 英語教育ハンドブック』 リーベル出版 pp.17-19, pp.25-27, pp.35-36
- 内藤 徹 1998. "Effects of the short term overseas study on English learning - Three weeks of study in Australia -" 『中部地区英語教育学会紀要27』 pp.293-298
- Richards, Jack *et al.* 1985. *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Lungman Group Limited pp.185